IS　～RISE　ON　METAL　WINGS～

来栖川　紅莉栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　～ＲＩＳＥ　ＯＮ　ＭＥＴＡＬ　ＷＩＮＧＳ～

【Ｎコード】
Ｎ３３２７Ｔ

【作者名】
来栖川　紅莉栖

【あらすじ】
男なのにＩＳが動かせる少年織斑一夏。だが、彼のほかにもう一人ＩＳを動かせる少年がいた。
その少年の正体は？二人の少年が織りなす物語はどこへ向かうのか。
いわゆる、オリ主ものです。「またかよ」とか言わないで読んでやっていくださいませ。

まえがき

＊注意＊

・この作品はいわゆるオリジナル主人公ものです。

・厳密に言えば一夏とオリ主のダブル主人公もの（になる予定）です。

・オリ主ハーレム（箒除く）です。

・オリキャラ、オリジナル設定などがでてきます。

・一部のキャラの性格が微妙に異なる可能性があります。

・この作者には才能、センスなどといったものは微塵も存在しません。

・この作品は１００％作者の自己満足でできています。

以上のことを覚悟したうえでお読みください

プロローグ

空、どこまでも続く果てしない広い空。

どんなに手を伸ばしても、その手が届くことはない。

いつも時間さえあれば、空を見ていた。

あの空の果てにあるものに思いを馳せた。

今日も僕はいつものように空を見ていた。

もし、僕に翼があったのならばあの空に手が届くのだろうか。

そんなことを考えながら、空に手を伸ばしていた。

「君が例の少年かい？」

ふと、声をかけられた。

その声に振り向くと女の人が立っていた。顔立ちは綺麗だが目の下に酷いクマがある。

格好はかなり意味不明で、まるで子供の落描きのような服だ。

「・・・お姉さん、誰？」

「あたしは、ただのしがない研究者さ。ところで、今君はどうして上に向かって手を伸ばしてたんだい？」

「あの空に手が届けばいいと思ったから」

「残念ながら、人は空には届かないよ。人は飛ぶための翼をもっていないからね」

女の人はそう僕の言葉を否定した。

「でも、運がよかったね少年。今日わたしは君にプレゼントをあげるために来たんだ」

「プレゼント？」

「ああ、君が望めばプレゼントしよう。あの空の果てまで飛んで行ける‘鋼の翼’を

プロローグ（後書き）

はじめまして、紅崎蓮也です。
どうしようもない駄文ですが暖かい目で見守ってください。

二人の少年

インフェニット・ストラトス、通称ＩＳ。女性にしか扱えないこの兵器が開発されたことにより世界は大きな変革を遂げた。

かつて宇宙用のマルチフォームスーツとして発明されたそれは現在、飛行パワードスーツとして軍事転用されている。

だが、ＩＳは同時に歪みも生み出した。

その一つは行き過ぎともいえる女尊男卑社会の形成である。ＩＳは従来の兵器を圧倒する性能を有しており、それを動かせるのは女性だけである為だ。

それ以外にもＩＳが生み出した歪みは人々が気付かぬままに拡大していた。

このどこか歪な世界の物語はＩＳが開発されてから数年後に幕が開ける。

ＩＳ学園――ＩＳの操縦者の教育の為の学校――の前に一人の少年の姿があった。容姿は銀髪のショートカット、つり目がちの緑の瞳、身長は１７０強くらいだろう。

「ここがＩＳ学園か。思った以上にでかいなこりゃ」

少年が校舎を見回していると校門のところにスーツを着た教師と思われる黒髪の女性がいるのに気が付く。

「お久しぶりです、千冬さん。会うのはあなたがドイツを去る時以来ですかね」

「ああ、久しぶりだな。お前はあの後もずっとあちこちの国で色々とやらかしていたらしいな」

少年とその女性は知り合いだったらしい。

「やらかしたとは失礼な。たしかに中国で警察に追っかけられたり、ロシアで変なＩＳにいきなり撃ち落されたりしましたが」

「十分にやらかしてるだろう。それより、何故あいつはお前をここに送り込んだ」

すうっ、と千冬の表情が厳しくなる。

「送り込んだって・・・別にそんなんじゃないですよ。ただ俺がここに来たかっただけですよ」

千冬はその返答には納得していないらしく、表情は厳しいままだ。

「俺は強くなりたいんです、誰かを守ってやれるほどに。そして、ここならそれができると思ったからここに来たんです」

「ドイツでの訓練では物足りなかったのか？」

「ええ、確かにあそこで俺の技術は著しく向上しました。でも、俺

がほしい力はそんなんじゃない」

そこで、やっと千冬の表情が穏やかになる。

「まあ、あとあなたの弟が気になったからってのもありますけどね。世界で唯一ＩＳを動かせる少年に」

「何を言ってる。お前も動かせるだろう」

少年の顔から一瞬表情が消える。そしてどこか悲しげな表情で

「俺のは所詮、紛い物ですから」

千冬も少年の雰囲気に触れては不味かったとおもったらしい。

「まあ、いい。それより付いて来い。お前の入学手続きを済ませねばならん。それと、これからは私のことは織斑先生と呼べ」

千冬が校舎に向かって歩き出すと、少年もそれに続いていった。

「どうも、如月零斗（きさらぎれいと）だ。これからよろしく頼むぜ」

自己紹介をしながら零斗はクラスを見回す。当然ながら、クラスメイトはほぼ全員が女子である。

「如月、お前の席は織斑の後ろの席だ。どいつの事かは説明せずとも分かるな」

「弟の事くらい名前で呼んだらどうですか、千冬さ――」

すぱんっ、と零斗の頭に千冬の出席簿が炸裂する。

「織斑先生と呼べと言った筈だ。無駄なことを言ってないでさっさと席につけ」

また叩かれるのは嫌なので大人しく指定された席に着く。

「織斑・・・一夏だっけか。たった二人の男子同士、仲よくしようぜ」

「よろしく。それより如月、千冬姉と知り合いなのか？」

「零斗でいい。千冬さんとはドイツにいたときに――」

すぱんっすぱんっ、と今度は二連発で炸裂した。

「織斑先生と呼べと言ったのが理解できなかったらしいな。それと、ＳＨＲを終わるから静かにしろ」

「零斗はここに来る前はどこにいたんだ？」

休み時間、席が前後である一夏と零斗は他愛のない雑談を交わす。

「そうだな・・・どこにいたかって聞かれると返答に困るな」

「？それってどういう意味だ？」

「俺は世界中を転々としてたからな。アメリカ、ドイツ、ロシア、イギリス、フランス、中国。言ったことのない国は多分数える程しかないと思う」

零斗の発言に驚きを隠せない一夏。

「すげえな。何だってそんなことになったんだ」

「まあ、いろいろあってな。俺からも聞いていいか。お前は何でＩＳを動かせたんだ？」

「さあ、むしろ俺のほうが聞きたいよ。・・・それより、零斗」

一夏が周りを見回してから、声のトーンを落として

「これって、どうにかならないのか？」

「無理だろうな。ＩＳが動かせる男子ってだけでも大変なのに、二人だからなあ。まったく、俺達は動物園のパンダじゃねえんだぞ」

教室の女子が全員、零斗と一夏を見ていた。教室の外の廊下にも二人を一目見ようと他のクラスや他学年からも女子が集まっている。

「ちょっといいか」

その時、声をかけられたので二人は振り向く。声をかけたのは長髪をポニーテールに結った少女だった。

「箒」

一夏が少女の名を呟く。彼女は一夏の幼馴染だった。

「ちょっと話があるんだが、いいか？」

一夏が零斗を見ると、手でどうぞいってこいというジェスチャー。一夏は箒とともに教室を出ていく。

「姉妹であんなに違うもんなんだなぁ」

零斗の呟きは周りの喧騒にかき消され誰の耳にも届かなかった。

その身に纏うは鋼鉄の翼（前書き）

なんてタイトル詐欺・・・

金髪ロールな彼女が登場です。

その身に纏うは鋼鉄の翼

「まったくわからねえ。」

休み時間の教室、一夏は教科書を前に頭を抱え、零斗はそれを見て笑っていた。

「入学前の参考書を読まないからだ。つうか、どうやったら電話帳と間違って捨てるなんて状況になるんだよ」

「うるさいな。そう言うお前はどうなんだよ。あの内容が理解できたのかよ」

一夏がそう言うと零斗はにやりと笑みを浮かべた。

「あの程度の内容はとっくに頭に入ってるぜ」

「ま、まじか・・・」

「お前がどうしてもと言うなら教えてやらんことも「ちょっとよろしくて？」」

「へ？」

「あ？」

いきなりかけられた声に二人は振り向く。自分が話しているのを邪魔された零斗はかなり不機嫌そうだ。

二人に声をかけたのは、わずかにロールがかった金髪の女子だった。つりあがったブルーの瞳で二人を見ている。その女子は『いかにも』今の女子という雰囲気をだった。

今の世の中、ＩＳの普及による行き過ぎた女性優遇によって女性は男性よりも偉いと認識している女性は少なくなかった。その女子はまさにそんな感じで腰に手をやる姿は貴族か何かを思わせる。

「いったい何の用だ」

そう零斗が返すと、その女子はわざとらしく声を上げた。

「まあ、なんですのそのお返事は。このわたくしに声をかけてもらえるだけでも栄誉なことだというのに」

一瞬、一夏と零斗はポカンとなり、二人で顔を見合わせた後、声を合わせていった。

「「いや、あんたのことなんか知らなしいし」」

その発現は少女を怒らせるのに十分な威力があったらしく声を荒げて言った。

「このわたくしセシリア・オルコットを知らない！？　イギリスの代表候補生であるわたくしを？首席で入学したこのわたくしを？」

一夏は未だによくわかっていないようだが、零斗はまじめな表情になった。

「へえ、代表候補生だったのか。なるほど、その無駄に自信に満ち

溢れた態度は伊達じゃないらしいな」

「なあ、零斗」

「なんだ」

「代表候補生って何だ？」

その発言に零斗と周りでその会話を聞いていた女子数名が盛大にずっこけた。セシリアはポカンとしている。

「お前なあ、それくらい字から予想できるだろ。代表候補生ってのは国の代表ＩＳ操縦者の候補になってる生徒のことだ」

「つまり、エリートということですわ」

セシリアがふふんと鼻を鳴らした。

「そんなエリートであるわたくしに声をかけてもらえるだけでも幸運なのですわよ。そのことを理解していただけるかしら」

「「そうか、それはラッキーだ」」

「・・・馬鹿にしてません？」

「お前が、幸運だっていったんじゃないか」

「まあ、いいですわ。それにしてもあなた、よくこの学園に入れましたわね。もしよろしければ、教えて差し上げてもよくってよ。なにせわたくしは入試で唯一、教官を倒した。エリートですから」

「あれ、教官なら俺も倒したぞ」

その発言にセシリアの表情が凍りつく。

「わ、わたくしだけと聞きましたが」

「女子ではってオチじゃないのか。っくく」

零斗の押し殺した笑いが漏れる。おそらく、本人の前でなかったら大爆笑しているだろう。

「あ、あなた本当に教官を倒したんですの！！」

一夏に詰め寄るセシリア。

「お、落ち着けって」

「これが落ち着いていられ」

その時、授業開始ののチャイムが鳴った。一夏はこの時ほどチャイムが鳴ってうれしいと感じたことはなかったという。

「三限目は実戦で使用する装備についての説明だが、その前にクラス代表を決めたいと思う。」

この授業は副担任の山田先生ではなく、一夏の姉の織斑千冬だった。

「クラス長はクラス対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会に出席などの役割もある。誰かふさわしいと思うやつはいるか。自薦他薦は問わん」

「はいっ、織斑くんがいいと思います」

「なっ！？」

クラスのあちこちで「織斑くんでいいとおもいまいまーす」という声が上がる。だが、一夏にとってそんなものは面倒でしかない。

「ほあかにはいないのか。ならクラス長は織斑で決定するぞ」

「はいっ！！零斗がいいと思います！！」

「なっ、一夏てめえ！！　織斑先生、俺は一夏がいいと思います！」

「いや、零斗のほうが！」

「一夏が！」

「零斗が！」

パアンッ、パアンッと二人の頭に千冬の名簿が炸裂する。

「やかましいぞ、お前ら。ほかにいないのなら、その二人のどちらかにするが」

「待ってください！納得いきませんわ！」

セシリアが叫びながら立ち上がり、バンと机を叩く。

「クラス長は実力から言ってわたくしがふさわしいでしょう。ＩＳが動かせる男子だからといって素人同然の人間がクラス長など、いい恥さらしですわ」

「ほう、つまり実力さえあれば構わないんだな」

その零斗の発言に皆が彼のほうに振り向く。すると、彼は口の端に笑みを浮かべていた。

「お前と勝負して勝てば文句ないんだろ」

「勝てると思ってるて？イギリスの代表候補生にして、専用機持ちであるわたくしに」

専用機という言葉に周りがざわめく。

「ん？専用機持ちってそんなに凄いのか？」

「ええ、ＩＳは世界に４６７機しか存在しません。そのうちの一機を与えられるのはほんの一握りのエリートだけなのですわ」

「へえ」

一夏も専用機持ちがどういうものなのか理解できたらしい。セシリアは自慢げに腰に手を当てている。

「そのことが理解してなお、戦うというのならハンデをつけてさしあげましょう」

「いらねえよ、そんなもん」

零とのその発言にセシリアをはじめ女子一同は目を丸くする。

「如月くん、いくらなんでも無茶だよ」

「そうだよ、ハンデつけてもらいなって」

「ハンデなんざいらねぇよ。俺も専用機持ちだからな」

専用機持ちという零斗の言葉に周りの女子がざわつく。

「あら、そうでしたの。でも代表候補生たるわたくしとは技術の差がありますわよ。わたくしのＩＳ稼働時間は３００時間は超えていますわ」

「残念ながら俺のＩＳ稼働時間も３００時間は超えてるんでね。技術面でも劣らねえよ」

その零斗の言葉にセシリアは驚きを見せたがすぐに笑みに戻り

「それはそれは、試合が楽しみですわね」

「覚悟してろよ。俺の鋼鉄の翼がお前を叩き墜とす」

その身に纏うは鋼鉄の翼（後書き）

果たして零斗のＩＳはどんな機体なのか！？

その正体はこれから考えます。

鋼鉄の翼、舞う（前書き）

初のバトルシーンです。いかがでしょうか。

「へえ、思ってたより広い部屋じゃねえか」

ＩＳ学園の寮、零斗と一夏は同じ部屋になった。まあ、男子が二人しかいないのだから当たり前だが。

「ところで、一夏、おまえ今度の試合どうするんだ？」

零斗とセシリアの言い合いの末、クラス代表は零斗、一夏、セシリアが試合をし、勝った者がなることに決定した。

ちなみに、一夏に拒否権など存在しなかった。

「お前、ほとんどＩＳ動かしたこと無いんだろ」

「ああ、入学試験の時に動かしただけだ」

ＩＳの操縦は稼働時間と実力はイコールと言われるほど稼働時間に大きく左右される。ＩＳをほとんど動かしたことのない一夏では機体がよほど優秀か、一夏の才能がずば抜けていない限り勝ち目はなかった。

「だったらあの子・・・箒ちゃんだったっけか、に教えてもらえよ。幼馴染なんだろ」

「まあ、たしかに幼馴染だけど６年会ってなかったし」

「あの子、お前に気があるみたいだしな」

零斗の言葉に一夏が盛大に吹き出す。

「な、何言ってんだよ、箒はただの幼馴染だって」

「・・・まあ、お前がそういうならそういうことにしておいてやる。ともかく誰かに教えてもらうなりしないと目も当てられないことになるぞ」

「ああ、箒に頼んでみることにする」

「そうしろ。俺も弱いものいじめは趣味じゃないからな」

一週間後、アリーナに零斗、一夏、箒の姿がある。この日は零斗とセシリアの試合の日だった。

「で、調子はどうなんだ、一夏。箒ちゃんに教えてもらったんだろ？」

零斗の言葉に箒がややばつが悪そうに目をそらす。その箒の様子を怪訝に思い、零斗は一夏にだけ聞こえるように聞く

「どうしたんだ。もしかしてずっとイチャイチャしてて特訓してな

いとか」

「いや、特訓はしてたけどずっと剣の訓練でＩＳのことはなにもしてない」

「・・・それは、どんまい」

「それより、零斗の方こそ大丈夫なのかよ。今日はお前の試合だろ」

「そいつのことなら心配はいらん。私が戦いというものを叩きこんだのだからな」

聞こえてきた声に三人が振り向くと、千冬が真耶と共にアリーナに入ってくるところだった。

「織斑、今日は如月の戦いをよく見ておけ。明日はそいつと試合するのだからな」

「明日の試合は今日勝った方がするのではなかったのですか？」

箒の問いに千冬はさも当然のように

「そいつがオルコットに負けることなど有り得んさ。それと如月、そろそろ試合の時間だ。

「了解です。如月零斗、いってまいります」

千冬に向かって、ビシッと敬礼のようなポーズをするとピット・ゲートにむかった。

零斗はＩＳを展開し、ビット・ゲートからアリーナ・ステージへと飛び出す。零斗の登場に観客達が沸き立つ。

「逃げずに来たのは褒めて差し上げてますわ」

「そいつはどうも」

セシリアは既にＩＳを展開し零斗を待っていた。その姿はまさに自信に満ち溢れており、自分が負ける可能性など微塵も考えていないように思われる。

「それで、それがあなたのＩＳですの？」

「ああ、そうだ。これが俺のＩＳ、【鋼鉄の翼】アイゼン・ヴィントだ」

そのＩＳアイゼン・ヴィントは銀というより鉄の色に近かった。その右手には刀身一メートル強の片刃剣―インドラ―が左手には大型の回転式拳銃（リボルバー）―アグニ―が握られている。だが、何よりも目立つのはその背にある翼だった。

「そちらは第三世代型ＩＳ『ブルー・ティアーズ』か。第三世代型兵器『ＢＴ兵器』が試験的に搭載されている主装備は《スターライトｍｋ２》、あと、全６機のビットからなるその機体の名前にもなっている《ブルー・ティアーズ》、近接戦闘用のショートブレイド《インターセプター》、あってるか？」

セシリアの表情が驚愕のものへと変わる。

「・・・驚きましたわ。まさか、そこまで調べ上げているなんて」
「戦闘において情報というものは戦況を左右する重要な要素だ。相手が格下だと思ってそういうものを疎かにすると痛い目を見るぞ」
「心配無用ですわ、わたくしとあなたの力の差はその程度で埋まるほど小さくはなくってよ」
そういうとセシリアは2メートル強はある巨大なライフル《スターライトmk2》を展開する。
「では、無駄話はここまでにして始めましょうかしら。さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲(ワルツ)で」
「淑女(レディ)をエスコートするのは男の役目だからな。お前こそ俺の舞踏(ステップ)についてこれるか！」
先手をとったのはセシリアだった。正確無比な射撃で零斗を狙い撃った。だが、その射撃が零斗に直撃するかと思われた瞬間、零斗の姿が消失した。
「！？」
相手の姿を見失い動揺を露わにするセシリア。目の前でいきなり人が消えれば誰もが同じ反応をするだろう。
「おいおい、どこ見てるんだ？俺はこっちだぜ」

その声に左方上空を見上げるセシリア。そこに消えたかのように思われた零斗の姿がある。

「今の瞬間加速（イグニッション・ブースト）についてこれないなら勝負にすらならねえぞ」

その零斗の言葉にセシリアは消えたように思えたのは高速で移動しただけだということに気が付き、そして衝撃を受けた。

「このＩＳは機動性に特化した機体でな。速さだけなら全てのＩＳ中、最速なんでねっ！！」」

そして、再び零斗は瞬間加速（イグニッション・ブースト）を行う。だが、

「あまり甘く見ないでくださる！？」

今度はその速さについていき、零斗を正確に捉え狙い撃った。だが、それは容易く躱される。

「おっとと、危ねえな。流石はイギリの代表候補生、もうこっちの速さについてきやがったか」

「わたくしも伊達に専用機を与えられているわけではありませんわ」

「いいねえ、そうでなければ面白くない。それじゃ、ここからは全力で行くぞ！！」

武器を構えたその姿は獲物を狙う鷹のようだった。

零斗が瞬間加速（イグニッション・ブースト）でセシリアに突撃する。そして、セシリアは《ブルー・ティアーズ》のビットを展開し、それを迎え討った。

「とんでもないスピードですね、如月君のＩＳ」

千冬、一夏、箒と共にモニターで試合を見ていた真耶はそう呟いた。

「だが、スピード以外の性能はそうでもないがな」

手元の端末で『アイゼン・ヴィント』のスペックを見ていた千冬が言う。

「へ？そうなんですか？」

「ああ、あの機体はエネルギーの７０％近くを加速に費やしているために防御性能は他のＩＳよりも低く、基本的にビーム兵器は使えない。せいぜい今あいつが使っている拳銃型のビームピストルが限界だ」

「防御性能が低いってどのくらいなんです？」

「普通のＩＳの６割程度だ。オルコットの《スターライトｍｋ２》なら２、３発食らえば終わりだろうな。《ブルー・ティアーズ》でも下手をすればバリアを貫く可能性がある」

「つまり、一発でも当たれば厳しいってことか」

「ああ、もっともオルコットがアイツに攻撃を当てらる可能性はかなり低いがな」

戦闘は零斗のペースのまま進行していた。高速で縦横無尽にアリーナを飛び回る零斗にセシリアはその動きについていくので精いっぱいだった。

（くっ、こうも出鱈目に動かれては動きが読めませんわ）

さらに零斗は動きを読ませない為に不規則な軌道を取っていた。未だにセシリアは零斗に一撃を加えるどころか、掠ることさえできていない。

「どうした、もう終いか？」

「まだですわっ！！ブルー・ティアーズ！！」

《ブルー・ティアーズ》の４つのビットが零斗を襲う。だが、それはあくまでセシリア自身が操作しているもの。本人が捉えられていないものに攻撃を与えられる筈がない。

「そんなのが当たるわけないだろ」

零斗はいとも簡単にそれを躱し、ビットの一つを切り裂き、間髪入れずにもう一つを撃ち落す。

「っ！！」

「さてと、これ以上続けてもただの弱い物いじめになっちまうから、

そろそろ終わらせるぞ！！」

瞬間、いままでの最高速度で接近し斬りかかった。セシリアも必死に応戦するが反応した時には既に攻撃を加えられている。

次々と続いていく斬撃。セシリアには致命傷を避けるのがやっとだった。

斬られたということを理解したときには既に零斗はその場にはいない。速さを生かした一撃離脱（ヒット・アンド・ウェイ）、それが零斗の得意とする戦い方だった。

「こいつで終いだ！」

試合を終わらせようと零斗は右手のインドラを振りかぶる。だが、その時、セシリアの口の端に笑みが浮かぶ。

「かかりましたわね、ブルー・ティアーズは六機あってよ！」

セシリアの腰についていたビットからミサイルが放たれる。零斗はそれをその身を翻し回避した。

「なっ！？」

「惜しかったな、だが俺の勝ちだ」

零斗がインドラを振り下ろし、その刃がセシリアのシールドエネルギーを一気に削り取る。

『勝者、如月零斗』

リポーターが勝者の名を告げる。さきほどの一撃でセシリアのシールドエネルギーが0になったらしい。

その瞬間、観客たちが沸き立つ。凄まじいまでの歓声が響いている。

「わたくしの負けですわね」

零斗がセシリアに向き直るとセシリアは穏やかな表情だった。

「あんまり悔しそうじゃないんだな」

「ええ、全力を出したうえでの負けですから。強いんですわね、あなた」

「・・・強くなんかないさ」

「え？」

「俺は、強がっているだけさ。もし弱気になったらもう前には進めない気がするから」

そういった零斗の表情にはどこが寂しげな色が浮かんでいた。

「なあ、セシリア。本当に強い奴ってにはどんな奴だと思う」

突然の問いにセシリアは父のことを思い出す。彼女の父はいつも他人の顔色ばかりうかがっているような人だった。そんな父をみて育ったセシリアは『強い人』に憧れるようになった。

「俺が思う強い人ってのはな、いるだけで人を安心させられるような人なんだ。自分を守れるだけの力じゃダメなんだ。周りの人たちを守ってやれる、そういう人に俺はなりたいんだ」

「それは厳しい道かもしれませんわよ」

「かもしれないな。だげど、俺はこの道を選んだことに後悔はない」

そう言った零斗の瞳はセシリアの憧れた強い瞳だった。

鋼鉄の翼、舞う（後書き）

やっと零斗が主人公っぽい感じになってきたかな？

次回は零斗ＶＳ一夏です

オリ主&オリＩＳ設定

如月　零斗

身長　１７４ｃｍ

体重　６７？

年齢　１６（戸籍上は）

趣味　機械いじり、ＩＳで飛ぶこと

好きなもの　青空

嫌いなもの　狭い場所

専用ＩＳ【アイゼン・ヴィント】

容姿　髪型は銀髪のショートカット、瞳の色は緑、目はやや吊り目

普段は軽い性格で口はやや悪いが困っている人（とくに女、子供）は放っておけないお人好しな性格。
本人が思っている以上に頭に血が上りやすい。
千冬が教官としてドイツにいたときに、いろいろあって黒ウサギ隊と共に訓練を受けていた。
戸籍上は１６歳になっているが正確な年齢は本人にもわからない。
ＩＳ関係の知識が豊富で暇な時は自分のＩＳの装備の設計をしている。

オリジナルＩＳ設定

名称　アイゼン・ヴィント

待機状態　銀のリストバンド

カラーリング　銀

特徴

第三世代型ＩＳ
背についている八枚の推進翼が特徴的なＩＳ。
機動力だけをひたすらに特化させた機体。
ちなみに、名前は零斗がつけたもので理由は格好いいから

武装

《アグニ》
拳銃型のビームガン。連射が可能で反動も限りなく小さいが威力はそれほど高くない。

《インドラ》
刃の部分にビームを纏っている双剣。刀身の長さは一メートル強。
零斗が最も多用する武器である。

オリ主&オリＩＳ設定（後書き）

後で修正するかも

漢の戦い　零斗ＶＳ一夏（前書き）

いまいち一夏のキャラがつかめない・・・

漢の戦い　零斗ＶＳ一夏

零斗とセシリアの試合があった翌日、零斗はアリーナのピットでアイゼン・ヴィントの状態を確認していた。

「よし、昨日のダメージは残ってない。徹夜した甲斐はあったな」

先日の試合でのダメージは彼の修理によってほぼ全快していた。

「零斗さん」

ふと名前を呼ばれて零斗が振り返るとセシリアが立っていた。だがその姿はいつもの自信に満ちた態度ではなく、どこか気恥ずかしそうなそんな感じだった。

「どうした、セシリア」

「い、いえ、そのですね。ＩＳの調子はどうですか？」

「問題ない。昨日のダメージもほとんど残ってないしな」

「そ、そうですか」

（？？？）

どこか煮え切らないセシリアの態度に疑問を浮かべる零斗。

「なあセシリア、何か言いたいことがあるんじゃないのか」

「え、ええ。そうですわね」

セシリアには言いたいことがたくさんあった。しかし、それらを口に出すことはできなかった。ただ一言

「がんばってきてください、零斗さん」

そう言うのがやっとだった。

それを聞いた零斗は一瞬、意外そうな顔をしたがすぐに笑みをうかべ

「ああ、行ってくる」

そう言ってゲートに向かっていった。

零斗がアリーナ・ステージに出るとほぼ同時に反対側のゲートから白いＩＳを身に纏った一夏が出てくる。アリーナの中心で二人は向き合う。

「そいつがお前のＩＳか」

「ああ、こいつが俺のＩＳ【白式】だ」

そういうと一夏はその手に白式の唯一にして最強の装備【雪片】を展開し、青眼に構える。

「さあ、始めるか」

「そうだな」

零斗も両手にインドラを展開し構える。

二人の間に沈黙が流れる。男どうしの戦いに言葉は不要。ただ、その拳が、その斬撃が言葉となる。

張りつめた緊張感に観客たちも息を呑む。世界が止まったかのような静寂。そして

「「はあああああああああ！！！」」

戦いの火蓋は切って落とされた。

「始まりましたわね」

「そうだな」

観客席、試合を真剣な表情でで見つめる乙女がふたり。箒とセシリアである。

「箒さんには悪いですが、この勝負零斗さんの勝利は間違いありませんわ」

「な、なにを。接近戦なら一夏の勝ちに決まっている」

口ではそう言う箒だが先日、セシリアに圧勝した零斗の実力を見て

いるので内心では不安を拭えない。

（一夏・・・）

だが今の彼女にできるのは一夏の勝利を願うことだけだった。

「はあああああ！！」

一夏の斬撃を零斗は一方の剣で受け止め、もう一方で斬り込む。二人の戦いは一進一退で進行していた。だが

（手加減されてる。いや、俺に合わせてるのか）

一夏はそう感じていた。零斗の得意とする戦い方は戦場を縦横無尽に飛び回るものだ。だが、今の零斗はそれをせずに一夏の距離で戦っている。

「やるじゃねえか、ＩＳに乗り始めてから一週間だとは思えねえよ」

「これでも剣には多少心得があるんでね」

「ああ、確かにいい腕だ。だが、甘い！」

零斗は斬りあいのペースを上げ、徐々に一夏の劣勢となっていく。

「くっ、こうなりゃ一か八かだ」

一夏は零斗から距離をとると次の瞬間に一気に加速しダメージを受けるのを覚悟し零斗の懐に潜り込んだ。

「！！」

「もらった！」

一夏は零落白夜を発動し、零斗に斬りかかる。だが、

「まだまだあああああ！」

零斗は一夏の顎を蹴り上げた。その衝撃で一夏は意識を手放しかける。その隙に零斗は一夏に斬撃を叩きこむ。バリアを貫いた一撃は絶対防御を発動させ一夏のシールドエネルギーを０にした。

《白式　エネルギー残量、０》

『試合終了。勝者――如月零斗』

勝者である零斗の名が告げられると、それを称えるようにアリーナに歓声が沸き立つ。

「零斗」

「ん？」

名前を呼ばれた零斗は一夏に向き合う。

「今回は負けちまったけど、次は負けねえからな」

「ああ、望むところだ。いくらでもかかってこいよ」

「へっ、言ってろ」

そう言うと零斗と一夏は互いに拳をぶつけ合った。

「お前ら、盛り上がってるかーーーーっ！！！」

「「「おーーーーーーーーーー！！」」」

寮の食堂、そこでは一年一組の生徒が集まってわいわいと盛り上がっている。壁には『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれたかみが張られている。

「・・・なあ、零斗」

「なんだ、一夏。これはお前が主役なんだからもっと楽しめよ」

瓶のコーラをラッパ飲みしながら馬鹿騒ぎをしていた零斗が一夏に飲み物を渡しながら答える。

「俺ってお前に負けたよな」

「ああ、負けたな」

「じゃあ、なんで俺がクラス代表になってんだよ！！」

「そりゃ、俺がクラス代表を辞退したからに決まってるだろ」

「いや、だったらセシリアになるんじゃないのかよ」

「わたくしも辞退させていただきましたわ」

聞こえてきた声に二人は振り向く。

「今回の試合でわたくしもまだまだ未熟だということを痛感いたしましたので」

「一夏、俺はお前に可能性を感じるんだ。お前はもっと高みを目指せるってな」

「もっともらしいこと言ってるが本音はなんだ」

「クラス代表なんて面倒なことやってられるか」

「零斗、てめえええええええええええ！！」

一夏の悲痛な叫びが響き渡った。

「どうもー、新聞部の黛薫子でーす。話題の男の子二人にインタビューしにきましたー。
まずは織斑一夏君、クラス代表になった感想をどうぞ」
ボイスレコーダーを向けられ戸惑う一夏。
「えっと、頑張ります」
「えー。もっと、俺に近づくと斬られるぜ。とか言わないのー」
「先輩、それはただの危険人物です」
「まあ、いっかどうせ捏造するからいいか。さて次はもうひとりの男子、如月零斗君！」
一同が捏造するのかよと心の中で突っ込むなか、零斗にボイスレコーダーが向けられる。
「そうですね、ご期待に答えるなら『あまり近づくと、俺のマグナムが火を噴くぜ』って感じですか？」
「いいねえ、その捏造しがいのあるセリフ！　じゃあ、ついでにセシリアちゃんもお願いね」

「わたくしはついでですか・・・ま、まあいいですわ。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかというと・・・」

「あー、長くなりそうだからいいや。写真だけ頂戴」

「聞いておいてその扱いは酷くないですの！」

セシリアの抗議を聞き流し薫子はデジカメを用意する。

「じゅあ、一夏君と零斗君、あとついでにセシリアちゃんも並んで」

一夏と零斗が並び、零斗の隣にセシリアが並ぶ。

「じゃあ、いくよー。２＋１５×３５×２２×０は？」

「「２」」

二人が答えると同時にシャッターが切られる。ちなみに、答えられなかったのが一夏なのはいうまでもない。

「って、なんか集合写真みたいになってるぞ」

シャッターが切られる瞬間、彼らの周りに一組の全員が集合しており零斗の言うとおり完全に集合写真になっていた。

ちなみに、箒はしっかり一夏の隣の場所を確保していた。

「ここがＩＳ学園ね」

ＩＳ学園の正門、髪をポニーテルに結った少女の姿がある。肩にはその小柄な身体には不釣り合いな大きなボストンバックを掛けている。

「しかし、一年間ずっと捜しても見つからなかったのに、こんなところで見つかるとはね」

少女は口元に笑みを浮かべる。

「あたしの前からいなくなったこと、後悔させてあげるわよ、零斗」

漢の戦い　零斗ＶＳ一夏（後書き）

話が進まねえ。

中国からの転入生

「ねえねえ、織斑君如月君、転校生の話聞いた？」

朝、零斗達が学校に来ると女子の一人がそんなことを言ってきた。

「転校生？まだ学校が始まって一か月も経ってないのにか」

「うん、なんでも中国からの転入生なんだって」

「へえ、中国からの・・・って、どうした零斗？」

中国という単語を聞いた途端、零斗は何故か暗雲とした表情になった。

「いや、中国にはあまりいい思い出がなくてな」

零斗はかつて中国で警察に追っかけまわされたという過去があった。

「そういえば一夏さん、もうすぐクラス対抗戦がありますが大丈夫ですか？」

いつのまにか傍に来ていたセシリアがそんなことを言った。

クラス対抗戦とはクラス間の交流や生徒の実力を測ることを目的としたクラス代表同士のリーグマッチである。

「まあ、何とかなるとは思うけど」

一夏が自信なさげにそう答えると

「おいおい、そこは絶対に勝つ！とか答えるところだろ」

「そうだぞ。男たるものそんなことでどうする」

零斗や箒の激励が飛んできた。だが、それだけではなく

「絶対に勝ってね！！織斑君！」

「織斑君が勝つとみんなが幸せだよ！」

「クラスみんなで応援してるからね！」

話を聞いていた周りの女子のやたらと気合のはいった応援の言葉も来た。そのあまりの気合の入りぶりに一夏と零斗が気圧される。

「なあ、何でみんなこんなに気合が入ってるんだ？」

「多分これが理由じゃねえかなあ」

零斗は机の中から一枚のプリントを引っ張り出すとその中の一文を読み上げた。

「えっと、『クラス対抗戦で一位になったクラスには学食デザートの半年フリーパスが与えられる』だそうだ。何でこんなものでやる気出るのか俺には分からんが」

「女子はみんなスイーツが大好きなんですのよ、零斗さん」

セシリアの言葉に、そういうもんなのかと一人納得する零斗。

「まあ、ともかく一夏のことは心配ないだろ。専用機持ちはお前と四組のやつだけだからな」

「その情報もう古いよ。二組も専用機持ちが代表になったのよ」

聞こえてきた声に零斗達が振り向くと教室のドアにもたれかかる様に腕を組んでこちらを見ている少女がいた。

髪型をツインテールにしているその少女は気軽に声をかける。

「ひさしぶりね、一夏」

「・・・おまえ、鈴か？」

一夏の問いに少女は無い胸を張って答える。

「ええ、中国代表候補生、凰鈴音。今日二組に転校してきたの。それと、あんたも久しぶりね、零斗」

鈴音の言葉に一同が零斗に注目する。だが、

「・・・誰だっけか、お前」

「・・・・え？」

零斗の返答に少し涙目になる鈴音。それを見た零斗は慌てだす。

「本当に覚えてないの？」

「ちょ、ちょっと待て、今思い出すから」
必死に思い出そうとする零斗。数秒ほど考え込んだ後
「ああ、たしか一年くらい前に会ったあの子か！」
零斗の答えに、ぱあっと顔を明るくする鈴音。
「やっと思い出した？本当に忘れてたら承知しなかったわよ」
「ああ、ちゃんと思い出したよ。久しぶりだな、鈴」
「ええ、積もる話があるけど今は時間がないから、零斗、あんた昼は空けておきなさいよ」
そう言うと零斗の返事を聞かずにさっさと自分のクラスに戻っていく鈴音に零斗は苦笑を浮かべる。
「まったく、あいつは相変わらずだな」
「なあ、零斗って鈴のこ――」
「ちょっと零斗さん！あの方とはどんな関係なんですの！？」
一夏の質問を遮り、セシリアが零斗の肩をすごい勢いで揺すりながら聞いていた。
「いったん落ち着けセシリア。もうすぐ――」

スパンッ、と爽快な音を立てながらセシリアの頭が出席簿で叩かれる。誰が叩いたかは言うまでもない。

「ＳＨＲが始まるから席につけ、オルコット」

セシリアはしぶしぶといった様子で席に戻っていった。

「あの方とのことについて話してもらいますわよ、零斗さん」

休み時間、零斗はセシリアに尋問もとい質問をされていた。

「わかったって。まあ、あいつとのことを詳しく話すと長くなるから簡潔に話すとだな」

零斗は顎に手を当て昔の事を思い出しながら話し始めた。

「まず一年くらい前に俺は野暮用で中国に行ったんだが、そこで警察に追っかけられる羽目になってな」

「いったいどうしたらそんな状況になるのだ」

箒が驚き半分、呆れ半分といった具合で言い、一夏もうんうんと同

意するように頷く。

「まあ、どうしてそうなったかは今は置いといて、俺はいくつかの街を転々と逃げ回ったんだが流石にやばくなって捕まりそうになったんだ」

「捕まったんですの？」

「捕まってたら俺は今ここにはいないだろ。その時、たまたま通りがかった女の子に助けてもらってな」

「それがあの娘、というわけか」

箒の問いに、そういうことだ、と答える零斗。

「アイツのおかげでなんとか逃げ切れてな、それでそのまま一週間くらい匿ってもらったんだ。まあ、アイツとの話はこんなところだ」

「そうでしたの。零斗さんも苦労なさってるのですね」

セシリアは零斗の話に納得したらしい。だが、

「そういえば一夏。あの娘はお前の事を知っていたがどういうことだ」

今度は箒が一夏に詰め寄っていた。

「ああ、そういえば箒は知らないのか。箒が転校したちょっと後に鈴が転校してきたんだよ」

「そうか、それでお前とアイツはどういう関係なのだ」
「どういうって、ただの同級生だけど」
「ただの同級生か・・・うむ、それならいい。うむ」
「？」
一人納得する箒に首をかしげる一夏だった。

「やっと来たわね。遅いじゃない！」
昼、零斗達が昼食に向かうと鈴音が仁王立ちで待っていた。
「いや、遅いじゃないって確かに昼にとは言ったが別に時間を決めてたわけでもないだろうが」
「まあいいわ。じゃ、お昼にしましょ」
席を確保しに行く鈴音。零斗たちも昼食のトレーを受けとり席に向かう。
「ねえ、零斗。あたしがあんたのＩＳの操縦みてあげよっか」
昼食が始まるなり鈴音はそんなことを零斗に言ってきた。
「あ？いらねえよ、そんなの」

あっさりと零斗は手をひらひらと振りながら断る。それに鈴音はむーっと頬を膨らませる。

「なによ、あんた代表候補生のあたしより強いっての？」

「ええ、零斗さんはこのわたくしよりお強いのですから」

セシリアが何故か自分の事のように胸を張って言う。

「あたしは零斗と話してんのよ。脇役は引っ込んでなさい。てか、あんた誰よ」

「なっ、イギリス代表候補生であるこのセシリア・オルコットを知らないのですの！？」

鈴音の言葉に激昂するセシリアを零斗がまあまあと宥める。

「ともかく俺は教えてもらう必要はねえよ。むしろ、一夏の方を見てやれ」

「な！？一夏に教えるのは私の役目だ！一夏にどうしても私に教えてほしいと頼まれたのだ！」

箒がテーブルをバンと叩きながら叫ぶ。隣で一夏がどうしてもとは言ってないけどななどと言っているが零斗は無視した。

ふと、鈴音が何か思いついたような顔でニヤリと笑みを浮かべる。彼女の頭の上で電球がピコーンと点滅したような気がした。

「ねえ、一夏あんたってクラス代表なのよね」

「え？ああ、そうだけど」

一夏の返答を聞くと鈴音は零斗に向き直る。零斗には彼女の考えが見当ついたらしく、冷や汗を流している。

「零斗、今度のクラス対抗戦で一夏を圧倒してあたしの方があんたより強いって証明してあげるわ」

そう言って軽い足取りで小食堂を去っていく鈴音。

「その、なんだ・・・すまん、一夏」

零斗が申し訳なさそうに頭を下げる。

「いや、別にいいって。どっちにしてもアイツとは試合することになってたんだからさ」

「ともかく一夏さんには特訓が必要ですわね。なんでしたら、わたくしもお手伝い致しましょうか？」

セシリアの提案に他の三人が意外そうな表情をする。

「へえ、気が利くじゃないかセシリア」

「一夏さんはクラス代表ですから、当然ですわ」

この時、セシリアには零斗によく見られたいという下心があったが些細なことだろう。だが、そのことに納得できない人物が一名。

「ま、待て！一夏に教えるのは私だ！」

箒にとってＩＳの特訓は一夏と二人きりになるのに都合が良かった。だが、セシリアや零斗が参加してはそれも叶わない。

「箒ちゃんの気持ちもわかるけどさ、ここは一夏のためとおもって、な？」

「むう・・・わかった」

一夏のためという言葉にしぶしぶといった様子で承諾する箒。

その後クラス対抗戦までの数週間、一夏は零斗、箒、セシリアとの特訓でかなり腕を上げていった。

数週間後、アリーナで一組代表と二組代表、一夏と鈴音の試合が行われていた。

一夏は甲龍の衝撃砲に苦戦しながらも互角の戦いを展開していた。

「あの衝撃砲は厄介だな、砲身すら見えないとは。如月、一夏は勝てると思うか？」

「・・・・・・」

「・・・如月？」

「ん？ああ、そうだな」

（妙な胸騒ぎがしやがる。何も起きなきゃいいが・・・）

嫌な予感がする零斗。この後、残念ながら彼の予感は的中することになる。

中国からの転入生（後書き）

次回で一巻の部分は終わります。
たぶん、きっと、おそらく、もしかしたら

クラス対抗戦（前書き）

やっと投稿できました。たぶん、いままでで最長です。

クラス対抗戦

一夏と鈴音は互いに一歩も退かない熾烈な戦いを繰り広げていた。

鈴音が衝撃砲を放ち、一夏がそれを紙一重で回避する。

（勝つには一瞬の隙を見つけて一気に仕掛けるしかない。チャンスは一回、それを逃せば俺の負けだ）

一夏は僅かな隙を探す。

（しかし、千冬姉には感謝しないとな。正直、瞬間加速（イグニッション・ブースト）が無かったら完全にチャンスは無かったからな）

先日、一夏は千冬から瞬間加速（イグニッション・ブースト）というテクニックを学んでいた。これはその名の通り、一瞬で爆発的にＩＳを加速させる技術である。

「いいかげん、落ちなさいよ！！」

（ここかっ！？）

鈴音が放った衝撃砲を躱すと同時に一夏は瞬間加速（イグニッション・ブースト）で距離を詰め、甲龍の懐に入り込む。

「っ！？しまった！」

「もらった！」

零落白夜を発動した雪片が甲龍の胴を捉えようとした、その瞬間

何かがアリーナのバリアを破って試合に乱入した。

「な、なんだ！？」

「な、なに！？」

戦闘を止めて二人は何かが侵入してきたと思われるものの方をみる。
それは地面に突っ込んだらしく砂埃が舞っていた。そして、砂埃が晴れたとき二人の目に映ったのは

全身を装甲で纏った正体不明のＩＳだった。

「もしもし織斑君、凰さん聞こえますか！？」

真耶が慌てた表情で一夏と鈴音に呼びかけている。

「落ち着け山田先生。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬はコーヒーに白い粉を入れる。

「あの・・・それ、塩ですけど」

「・・・・・・」

「やっぱり、弟さんが心配なんですね。だから、そんなミスを」
「山田先生。このコーヒーを飲みたまえ。程よくしょっぱくてスッキリするぞ」
そう言いながらさらにコーヒーに塩を入れる千冬。コーヒーはもはや液体ではなくドロリとした物体と化していた。
「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ」
セシリアが名乗り出る。だが千冬はそれを許可しなかった。
「そうしたいところだが、これをみろ」
千冬が端末の画面を叩き情報を切り替える。
「セキュリティーレベル４！？あの侵入のせいですの！？」
「ああ、おそらくな。だからお前らは大人しく――」
「織斑先生」
零斗の声に二人が振り向く。その後に続いた零斗の言葉は驚くべきものだった。
「俺がシステムにハッキングを仕掛けてセキュリティーを解除します」
セシリアと真耶の表情が驚愕に変わる。千冬は顔にこそ表していな

いが内心零斗の発言に驚いていようだった。

「ほ、本気ですの零斗さん！？ＩＳ学園のセキュリティーは世界最高レベルですのよ！！」

セシリアの言うようにＩＳ学園のセキュリティーは世界で１、２を争うレベルでここよりハッキングが難しいのはおそらくペンタゴンくらいである。

「おまえは何を言って・・・そうか、おまえは・・・」

少しの間、何かを考え込んでいた千冬だったが意を決した表情になり

「如月、お前がシステムにハッキングするのにどれだけかかる？」

「１０分いや、５分もあれば十分です」

世界最高クラスのセキュリティーをたったの５分で突破するなど正気の沙汰ではない。だが零斗の表情に迷いなどは微塵も無かった。

その表情を見た千冬は零斗の言葉を信じたのか、それとも他に手が無かったからか

「よし、如月やるだけやってみろ。オルコット、お前は出撃準備をしていろ」

アリーナでは一夏、鈴音と乱入してきた正体不明のＩＳとの戦闘が続いていた。

鈴音が衝撃砲を放ち、間髪入れずに一夏が斬り込むという戦い方だったが正体不明のＩＳはそれを難なく回避していた。

「意外としぶといわね、あいつ」

「なあ鈴、あいつの動きを見てると何か思い出さないか？」

「何かって何よ」

「ほらあれだよ、一昔前に流行った二足歩行のロボット」

「それがどうしたってのよ、いったい」

「あいつ、もしかして無人機なんじゃないか」

「はあ！？そんなことは有り得ないわよ。ＩＳは絶対に人が乗らないと動かないんだから」

「でもあいつの動きをみてるとそうとしか思えない。どこか動作が人間的じゃないっていうか、機械的っていうか」

「無人機だったら何なのよ。白旗でもあげる？」

「無人機だったらあいつに勝てる」

一夏の表情には一切の迷いは無く、あるのは確固たる自信のみ。

「いったいその自信がどこから来てるのかは知らないけど、いいわ、あんたを信じたげる」

二人が互いに目を合わせ仕掛けるタイミングを計っていた、その時

『一夏っ！！！』

スピーカーから流れてくる大音量の箒の声。咄嗟に一夏と鈴音が辺りを見回すと中継室に肩で息をしている箒の姿があった。

『男ならそれくらいの敵に勝てなくてどうするっ！！』

そう叫んだ箒の表情は怒っているような、でもどこか不安そうなそんな様々な感情の入り混じった表情だった。

『だからっ、だからっ、絶対に負けるなっ！一夏っ！！！』

箒の叫びに胸の奥になにか熱いものが湧き上がってくるのを感じる一夏。だが、当然ながらその声に反応したのは一夏達だけではなかった。

その無人機と思われるＩＳのその装甲に覆われた顔が箒のほうに向いた。そして右腕のビームの砲口を箒へと向ける。

「鈴っ！！あいつに衝撃砲をフルパワーで撃て！！」

鈴音が衝撃砲をフルパワーで放つ。その瞬間に一夏は衝撃砲の射線上にその身を割り込ませる。

「ちょっと！？何やってるのよ一夏！」

その鈴音の声を聞きながら、一夏はその背に衝撃を感じる。

（頼むから間に合ってくれ）

そして一夏は衝撃砲のエネルギーすらも利用し爆発的な瞬間加速（イグニッション・ブースト）を行った。

（たとえこの身体が壊れようと構わない）

爆発的な加速に体のあちこちが悲鳴を上げるがそれを無視する。

（俺はあいつを失いたくないんだ！）

一直線に敵ＩＳへと向かう。敵ＩＳの砲口にはエネルギーが溜まりつつあった。

「間に合えええええええええええええええ！！！」

ビームが放たれるその刹那、僅かに早く一夏の雪片が敵ＩＳの右腕を切り落とした。だが

「しまった！？」

敵ＩＳの残った左腕の砲口が狙ったていたのは一夏ではなく鈴音だった。衝撃砲を最高出力で撃った直後の鈴音には不可能だった。

「っ！？」

鈴音が恐怖に目を閉じる。だが、いつまでたっても衝撃はこない。
鈴音が恐る恐る目を開けると
「危ないところだったな。大丈夫かい？お嬢さん」
鈴音は零斗に抱きかかえられていた。鈴音は一瞬、状況が理解できなくなる。
「まったく、間に合って良かったぜ。おっと」
鈴音を抱きかかえたまま飛んできたビームを回避する零斗。
「しつこい奴だな、おい。セシリア！やっちまえ！」
そう零斗が言った瞬間、敵ＩＳが四方八方からのビームによりその身を貫かれた。全身を貫かれた敵ＩＳは完全に沈黙する。
「あれだけやればもう動かねえだろ。しかし、流石だなセシリア」
「ええ、もちろんですわ。わたくしにかかればあの程度の事、どうということありませんわ」
展開していた《ブルー・ティアーズ》を収納しながらセシリアが零斗達の傍に着地する。
「！？ちょっと、凰さんいつまでそうしているんですの！！」
「ふえ？・・・！？ちょっと！早く降ろしなさいよ！」
鈴音は零斗にお姫様抱っこで抱きかかえられている状況を理解する

とジタバタと暴れだした。ちなみにＩＳを展開したままなので本気で暴れるとわりと洒落にならない。

「ちょ、分かったから暴れるなって。今、降ろすって」

零斗が鈴音を降ろすと、ちょうど一夏も傍に来たところだった。さきほどの影響が少なからずあるのか動きがどこかぎこちない。

「来てくれて助かったよ、零斗。でもいったいどうやって来たんだ？たしかセキュリティーが上げられて動けなかったんじゃ」

「ああ、その事か。それなら、俺がちょっとシステムにハッキングしてセキュリティーを解除した」

「はあ！？ちょっとそれ本当なの？ＩＳ学園のシステムに侵入するなんて絶対無理よ」

「いえ、零斗さんはそれをやってみせましたわ。わたくしも本当に驚きましたわ。零斗さんはすごい人ですのね」

そう言って熱っぽい視線で零斗を見つめるセシリア。

「ところで、一夏は怪我とかはして無いか？何か無茶をしてたみたいだが」

「ああ、身体のあちこちが痛いけどそれほど酷くは――――」

その時、敵からのロックオンを告げるアラートが鳴り響く。零斗達がが振り向くと倒したかと思われていた敵ＩＳが一夏に砲口を向けており、そこには既にエネルギーが充填されている。

「くっ、まだ動けたのか！！」

零斗とセシリアが一瞬で自らの武装を展開し狙い撃つ。だが、それが届くよりも早く敵ＩＳの左腕から最高出力のビームが放たれる。

「くっ、雪片！」

咄嗟に雪片を展開しそれを迎え討ったが全てを相殺しきることはできず、強烈な熱量が襲い一夏は意識を手放した。

一夏が目を覚ました時、見えたのは真っ白な天井だった。

「ここは・・・」

「ここは保健室だ」

聞こえてきた声に一夏が振り向こうとすると全身に痛みが走る。何とか首だけ動かして振り向くとそこには千冬と零斗の姿があった。

「お前は敵のＩＳの攻撃を受けていままで気絶してたんだよ」

「ああ、どこかの馬鹿が敵が戦闘不能になったのかを確かめなかったおかげでな」

千冬の嫌味に苦笑いを浮かべる零斗。一夏が窓の外を見ると空が赤

く染まっていた。気を失っていたのは2，3時間らしい。

「あの後、あのＩＳはどうなったんだ？」

「あのＩＳなら完全に動けなくなるまで破壊して、今はどこのＩＳだったのかを調べているところだ。あと、今回の件での負傷者はお前を除けば生徒、教員共に０だ」

「そうか、よかった」

自分が負傷しているのに負傷者が自分以外いなかったことに喜んでいる一夏に千冬は苦笑する。

「まったくお前というやつは

「それと千冬姉」

「ん？なんだ」

「その、心配かけてごめん」

その一夏の謝罪に千冬は一瞬驚いたような表情を浮かべるが、すぐに優しい表情になり

「心配などしていないさ。お前は私の弟だからな」

「ははっ、なんだよそれ」

「さてと、私はそろそろ行かなくてはな」

千冬は立ち上がると零斗の襟のあたりを掴んで
「こいつに尋も・・・二、三聞きたいことがあるからな」
「今、あきらかに尋問で言おうとしましたよね！？」
零斗の叫びを千冬は完全に無視すると扉のほうを見る。
「それに心配でしょうがない奴もいるようだしな。篠之野、そんなとこにいないで入ってきたらどうだ」
千冬がそう言うと扉の外でガタンガタンという音がし、しばらくすると箒が部屋に入ってきた。
「・・・いつから気づいてたんですか？」
「最初からだ。さてと私は行くが」
千冬は零斗の襟を掴んだまま引きずっていき、扉の所で振り返り
「一夏が動けないからといって押し倒すなよ」
「っ！？そ、そんなことしません」
箒は真っ赤になって否定する。それを見て千冬は笑って零斗を引きずったまま部屋を出て行った。
そのあとしばらく箒は真っ赤になったまま黙り込んでいたが
「あ、あのだなっ。今日の試合だが」

「そういえば、今日の試合ってどうなったんだ。やっぱり無効試合なのか」

「まあ、そうなるだろうな。あんなことがあったのだから。そんなことより」

箒の表情が真面目なものへと変わり

「お前は何を考えているんだっ！！！」

力の限り叫んでいた。その突然の叫びに一夏は戸惑う。

「あんなことは先生方に任せておけばいいだろう！過剰な自信はみを滅ぼすという言葉を知らんのか！？」

箒の目はうっすらと涙に濡れ、今にも泣きだしそうだ。

「勝てたからいいもの、そんなにぼろぼろになって」

徐々に感情が抑えきれなくなりに声が上ずってくる。

「わたしが、どれだけ、心配したと」

箒の目から涙が溢れ出した。

「箒・・・」

泣いている箒を一夏は優しく抱き寄せる。体を動かすたびに痛みが走ったが無理やり抑え込む。

「一夏・・？」

「心配かけてごめん。でも大丈夫だから。俺はちゃんとここにいる。だから泣くなよ、箒」

そう言い箒の頭を撫でる。箒もいつものように照れ隠しで抵抗することもなく大人しくされるがままになっていた。

「・・・約束しろ」

「え？」

「約束しろ。もうあんな無茶はしないと」

「ああ、わかったよ。もうあんな無茶はしない」

「うむ、それでよろしい」

箒が上機嫌に答える。箒はもう既に泣き止んでいたが特に離れれようとしないので抱き寄せたままだ。その時

ガタン、と扉のほうで音がした。一夏がそちらを見ると走り去っていく影が目に映った。

（・・・鈴？）

ＩＳ学園の地下５０メートルの空間、そこに千冬と零斗の姿があった。彼らは正面のディスプレイでアリーナでの正体不明のＩＳとの戦闘を繰り返し見ていた。

「・・・で、織斑先生。聞きたいことって何ですか？まあ、ある程度は見当がつきますが」

「だったら話が早いな。単刀直入に聞くが今回の件あいつは今回の件に関わっているのか？」

千冬はディスプレイを操作しあるデータを表示させる。

「襲撃してきたＩＳの解析結果だが、そのＩＳは無人機だったそうだ。まだ世界のどこの国もＩＳの遠隔操作、もしくは独立稼働どちらも開発に成功した国はない。そして、あのＩＳに使用されていたコアは登録されていないコアだった。」

零斗は困ったような表情を浮かべ、頭を掻きながら

「やっぱり、そうでしたか。とりあえず質問に答えると俺は何もあの人から聞いてはいません。俺は今回の件にあの人が関わっていいるかは―――」

突然、ピピピピピピピピピと電子音が二人の間に鳴り響く。零斗は制服の内ポケットから携帯を取り出した。

「・・・どうやら、いろいろと手間が省けたみたいですよ」

「？それはどういう意味だ」

それに零斗は答えず、携帯を通話中にして千冬に手渡す。千冬がそれを耳にあてると余りにも場違いな声が聞こえてきた。

「やっほーーー！愛しのちーーーちゃーーーーん！」

「・・・束」

「んー、相変わらず暗いなあ。ほらもっとスマイルスマイル」

「無駄話をするつもりは無い。あの無人ＩＳ、あれを造ったのはお前か？」

千冬の感情の一切ない声に対して、返ってきたのは不釣り合いな今にも笑い出しそうな声だった。

「何言ってるのさ、この私があんな暴走するような不良品を造るわけないじゃないか」

「では、今回の件におまえは絡んでないんだな」

「当たり前だのクラッカーだよ。まあ、誰があれを造ったのかは見当がつくけどね。あ、それとれいくんにかわって」

千冬はまだ何か言いたそうだったが、これ以上なにかを言っても無駄だと判断したらしく零斗に携帯を手渡す。

「はい、代わりましたよ」

「あー、れいくん？今回は大変だったみたいだね～」

「そう思うなら特注の新しいＩＳ装備でも送ってください。それもとびきり強力なやつを」

「残念だけどまだ君を人殺しにしたくないからめー」

どんな威力だよ、と心の中で突っ込む零斗。

「それが新しい武器の実験だとか言って人に各国の軍を襲撃させてた人の言うことですか」

零斗は束に実験と称して各国の軍の訓練などに乗り込みかき乱すだけかき乱して去っていくという迷惑極まりない事をさせられていた。しかも、それをさせた理由は退屈だったからである。

「はれ？そんなことあったけ？」

しかも、当の本人は忘れていた

「・・・まあ、そのことは置いといて。今回の件についてあなたはどのくらい知ってるんですか」

「今回の件は亡霊（ファントム）の仕業だと思うよ」

束の言葉に零斗の表情が驚愕に変わり、そして次の瞬間には激しい怒りに変わっていた。

「連中が・・・！」

拳を握りしめ、凄まじい怒りを浮かべる零斗。千冬は今まで見せなかった零斗の表情に驚きを隠せない。

「束さん、連中の場所は分かりますか？今すぐにでも俺が――――」

「れいくん」

零斗は束に言葉を遮られる．その束の口調は先程までのふざけた感じはない。

「君が連中と浅からぬ因縁があるのは知ってるけど、一応は君の保護者代わりとして君を危ないめには遭わせられないなあ。君に何かあったら私も悲しいしなあ」

束の言葉に零斗は少しだけ言葉を詰まらせる。だが、次に言葉を発した時には頭が冷えたらしく

「わかりましたよ。できるかぎり連中には関わらない、これでいいんでしょ」

「そうそう、れいくんは物わかりが良くて嬉しいなあ。そういうことはちーちゃんにでも任せちゃえばいいよ。それじゃあ、無茶はしちゃダメだからねぇ。バーイ」

そして束は一方的に通話を切る。その唐突さに零斗は苦笑する。

「まったく、あの人は・・・。しかし、無茶はするなか。それができれば苦労はしないさ」

そんな呟きが零斗の口から洩れた。

クラス対抗戦（後書き）

こんな書いている本人でさえ読みづらいと思うような駄文を読んでいただきありがとうございます。

次回から2巻の内容に入りますが、これからはさらにオリジナル色をが強くなっていきます。

束のキャラがわからない・・・いや、ほかのキャラも微妙だけど

Shadow in the dark（前書き）

次回は2巻の内容に入るといったのにごめんなさい。次こそはきっと入ります。
オリキャラ登場します。あと、原作と一部設定が異なっております。
それらを理解した上でお読みください。

Shadow in the dark

あるビルの一室、照明が消され薄暗い部屋で男が幾枚かのモニターと向き合っている。そのモニターにはおそらく皆かなりの地位に就いていると思われる身なりをした者達が映っていた。

『さて、今回の件についての君の申し開きを聞こうか』

スピーカーから男の声が流れる。どうやらモニターの者達の内の一人が発言したものらしい。

『君が開発していた試作段階の完全自律型の無人ＩＳを暴走させ、仕舞いにはそれをＩＳ学園の者達に鹵獲されるなど。君は事の重大さを理解しているのかね？」

その声はかなりの威圧感を持って発せられたが、男は微塵も動じなかった。それどころか、その口の端には笑みさえ浮かんでいる。

「ええ、十二分に理解していますとも。今回の件で我々の存在が明るみに出る能性があったことも、それに政界や財界の重鎮である皆さんが我々に関わりを持っている事が知れればどうなるかも、ね」

男の言葉にモニターの向こうがざわめく。

『言葉に気を付けたまえ。ここでプロジェクトから外されるのは君の本意ではないと思うが？」

「これはとんだ失礼を。過ぎた無礼をお許し下さい」

男は素直に頭を下げる。だが、その顔にはまだ笑みを浮かべたままだ。

「さてと、話が少々ずれてしまいましたね。今回の無人ＩＳの暴走の件でしたか。まず初めに私の意見から述べることに致しましょう。私は今回の件は失敗などとは思っておりません」

その言葉に先程よりも大きなざわめきが起こる。

『いったい君は何を考えているのかね。今回の件が失敗でないなどと』

「確かに試作機はＩＳ学園に鹵獲されましたが、しかしそれを考慮しても十分すぎるデータを収集できました。それにあれが第三世代型とも十分に渡り合えることも証明されました」

『あの機体からこちらのことが割り出される可能性は無いのかね？』

「ご心配はいりません。あの機体にはこちらの身元が判明するようなものは搭載されておりませんでした。それに、その件についてはこちらで既に手は打ってあります」

スピーカーが沈黙する。どうやら考えを纏めているらしかった。

『・・・いいだろう。今回の件は不問にする』

「感謝します。そうそう、それともう一つご報告することが」

『何かね？』

「実験体０１０が発見されました。どうやら現在はＩＳ学園に生徒として在籍しているようです」

『実験体０１０とは、篠ノ之束に奪取されたあのプロジェクトの唯一の成功体のことかね』

「ええ、そうです。もっとも今は手出しができない状況ですが」

『奴のデータはプロジェクト成功の鍵と成り得る。どんな手段を使っても奴を捕獲しろ』

「了解しました。善処することに致しましょう」

『では今回の会合はこれで閉じることにする』

モニターが暗転し沈黙する。男は近くにあった椅子を引き寄せ腰を下ろしふう、と息を吐く。

「ハウンド、いるか？」

その声に反応するようにモニターの一つが再び起動する。

『ああ、お偉いさんのご機嫌取りは終わったのか？』

「まったく厄介だよ。あんな連中の顔色を窺わなくてならないのは。それよりもお前に頼みたいことがある」

『お偉いさんの相手をお前の代わりにしろってんじゃないだろな』

「まさか。お前にはＩＳ学園を襲撃してもらいたい」

まるでおつかいでも頼むかのような気楽さで男は言う。それを聞き、モニターに映る先程ハウンドと呼ばれた男は実に楽しそうに笑っている。

『いいね、実に俺好みな任務じゃねえか。で、目的は？』

「まず一つは織斑千冬の排除。彼女は我々の障害となる可能性が最も高い。障害は早い段階で片づけておくべきだからな」

『かのブリュンヒルデを始末してこいとは、お前も随分と無茶を言うな』

「何だ、怖気づいたのか？」

『まさか、むしろ武者震いが止まらねえよ』

「結構。あともう一つは篠ノ之箒という少女の確保だ」

『あ？確保だあ？なんだって確保なんだよ』

「彼女には逃げ回っている悪いウサギちゃんを捕まえるための餌になってもらわなくてはならないからな」

『取り敢えずは覚えといてやるよ』

「ああ、そういえばＩＳ学園には更識の者がいたな。まあ、お前なら問題ないだろう。誰か他の連中も連れていくか？」

『いらねえよ。俺一人で十分だ』

「そうか、では良い結果を期待する」

そう言ったのと同時にモニターが暗転し、再び部屋は沈黙に包まれる。

「猟犬(ハウンド)の牙を相手にどこまでできるか、お手並み拝見といこうじゃないか。白き刃と鋼鉄の翼」

Shadow in the dark（後書き）

こんな終わり方ですがこのオリキャラが本格的に出てくるのはシャルとラウラが登場し、学年別トーナメントが終わってから（つまり2巻の部分が終わってから）です。
あとこのキャラのほかにもオリキャラを出すと思います。ご理解ください。

金の貴公子と黒ウサギ（前書き）

久しぶりの投稿です。
なんか一夏と零斗ばっかだ・・・

金の貴公子と黒ウサギ

「今日は皆さんに転校生を紹介します」

朝のＳＨＲの時間、山田先生の言葉にクラスメイトの間でざわめきが起こる。それはたった二人の男子である零斗と一夏も例外ではなかった。

「おいおい、転校生ってつい先日一組に鈴が来たばっかりじゃねえか」

ＩＳ学園の一学年への転校生は入学式から2か月弱で二例目である。零斗の反応は当然と言えるだろう。

「しかも、今回は二人同時です」

「「はあ？」」

零斗と一夏の声が重なる。一人の女子がおそらく全員が抱いていたであろう疑問を山田先生にぶつけた。

「あの、先生。それって二人ともこのクラスなんですか？」

「ええ、ちょっと訳があって二人ともこのクラスなんです。それじゃ、二人とも入ってきてください」

教室の前方の扉が開かれ転校生と思われる二人が入ってくる。そのうち一人を見て一同が驚きで言葉を失う。

その一人が男子だったからだ。その男子は金髪の髪を三つ編みにして、顔立ちは中性的で美形かと問われればおそらくほとんどの人が美形だと答えるだろう。

「シャルル・デュノアです。女性の方ばかりで緊張していますがよろしくお願いします」

その男子が礼儀正しく礼をする。それに合わせて三つ編みに編まれた金色の髪が揺れる。

「こちらには僕と同じ境遇のかたが居られると聞いたので、お願いしてこのクラスに編入させてもらいました」

零斗と一夏が互いに顔を見合わせる。このクラスに二人同時に転校生が来た理由のうち一つはこれらしい。

「まあ、確かに女子の中に男子一人ってのはしんどいからな」

「そうだな。それより、デュノアってまさか・・・」

その時、零斗は女子が全員、沈黙していることに気が付く。

「やば、おい一夏、急いで耳塞げ」

「へ？なんでだ」

一夏は零斗の言っている意味が分からなかったがとりあえず耳を塞ぐ。その時

「「「き」」」

「き？」

「「「「きゃあああああああああああああああ！！！」」」」

いっせいに響き渡る女子たちの黄色い歓声。零斗と一夏が耳を塞いでいても頭に響いてきた。

「男子！三人目の男子！」

「それもまた二人とは違うタイプ！」

「守ってあげたくなるような男の子！」

女子たちの勢いに圧倒されるシャルル。どうしようかと戸惑っていると、パアンと手を叩いた音が聞こえる。

「やかましいぞお前ら。そんなに元気があり余っているなら校庭を１０周ほどしてくるか？」

どうやら先程のは千冬が手を叩いた音だったらしい。千冬の言葉に女子達はすぐに静かになる。

「さてと、では自己紹介の続きを・・・ボーデヴィッヒ！」

千冬の言葉にもう一人の転校生が前に進み出る。

もう一人の容姿はある意味でシャルルよりも印象的だった。腰近くまである銀髪の髪、赤い目、軍服を思わせる制服、だが何より目を引くのは左目に着けた眼帯だった。

「お久しぶりです、教官」

そう言いながらボーデヴィッヒと呼ばれた少女は千冬に敬礼をする。それを見て千冬は面倒そうな顔をする。

「ここでは私は教官ではなく教師だ。それとさっさと自己紹介をしろ」

千冬に促され、はっ、ともういちど敬礼をしてからクラスの面々に向き直る。

「ラウラ・ボーディッヒだ」

「・・・・・・・・・・・・・」

「え？終わり？」

女子の誰かがそう呟く。そのラウラはクラス全体を見回している。その視線が零斗のものとぶつかったと時、ラウラは僅かに驚いたような表情を見せる。

「よっ」

零斗は手を挙げてその視線に答える。それに対するラウラの表情はどこか戸惑っているようなものだった。

だが、その視線が一夏を捉えたとき、ラウラは表情をはっきりと怒りのものへと変えた.

「っ！貴様は！」

ラウラは一夏に歩み寄るとその手を振り上げ、平手で一夏の頬を打った

かに、見えたが

「そこまでだラウ」

一夏に平手打ちをしようとしていた手を零斗が掴んでいた。

「何故止める零斗。こいつのせいで教官は――」

「お前の言いたいことはよくわかる。だけど、ここは怒りを収めてくれないか？」

二人はしばらくの間その態勢のまま睨み合っていたが、互いに手を離し自分の席へと戻っていく。

「これでＳＨＲを終わる。一限目は二組と模擬戦闘を行う。それと織斑と如月はデュノアの面倒を見てやれ。以上だ」

ラウラの行動に唖然となっていた生徒たちは千冬の言葉で正気にもどった。

「なあ、シャルル。デュノアってもしかしてあのデュノアか？」
零斗、一夏、シャルルが三人で一限目の授業が行われるアリーナに向かう途中、零斗は先程から気になっていたことを聞いた。
「うん、たぶん零斗の思っている通りだと思うよ。僕の父はデュノア社の社長をしてる」
「零斗、デュノア社って・・・」
「フランスに本社を置くＩＳ関係の会社だ。ＩＳのシェアは世界第三位でこの学校にある機体も半数くらいはデュノア社製の『ラファール・リヴァイブ』だった筈だ」
「シャルルはそこの御曹司ってわけか・・・って零斗、やばいぞ」
一夏の言葉に零斗とシャルルが辺りを見回すと彼らの周りに女子たちが集まってきたいた。
「噂の男子、発見！！」
「黒髪も銀髪も捨てがたいけど金髪もいいわね」
「見た！こっち見た！きゃーー！」
噂の男子を見ようと一年から三年までの全校生が彼らの周りに集まりつつあった。
「やれやれ、女子高生のパワーには驚かされるな。さっさと逃げる

ぞ、二人とも」

零斗の言葉を合図に三人はいっせいに走り出す。だが、走っているうちにシャルルが徐々に遅れてくる。

「おい、大丈夫かシャルル」

「はあ、はあ、だい、じょうぶ」

「いや、大丈夫じゃないだろ。まったく世話が焼ける」

そういうと、零斗はシャルルを抱きかかえる。それも何故かお姫様抱っこで。

「ふえ！？」

「アリーナまで一気に行くぞ！一夏、しっかりついて来いよ！」

背中に追いかけてくる女子たちの声を受けながら、零斗はシャルルを抱きかかえたままアリーナまでの道を全力で駆け抜けた。

アリーナに着くとすぐに三人は更衣室でＩＳスーツに着替える。

「やっぱ着づらいよな、こいつ。何とかならねえのかよ」

「まあ女子用だしなあ、これ。男子が着ることを想定してるわけないしな」

ＩＳスーツを着るのに悪戦苦闘する二人。彼らは既に数十回はこれを着ているが未だに慣れなかった。

もっとも女性用の衣服を着なれている男というのもかなり嫌だが。

「む、どうもあれの位置が・・・よし、そっちは着替え終わったか、シャルル？」

零斗が振り向くと、シャルルは着替え終えており、何故か顔を真っ赤にさせあうあうと意味の分からない言葉を漏らしていた。

「どうした？おまえ顔真っ赤だぞ。熱でもあるのか？」

「べ、別に何でもないから！心配しないで！」

手を振って力強く否定するシャルルに、二人は顔を見合わせた。

「まあ、何でもないならさっさと行こうぜ。急がないと千冬姉の制裁を食らう羽目になっちまう」

幾とどなく千冬の出席簿を食らったことのある零斗が露骨に嫌な顔をする。事情を知らないシャルルはキョトンとしている。

「えっと、制裁って？」

「知らないなら知らないままのほうがいい。ともかく急ごうぜ」

三人は駆け足で向かう。だが、

「間に合ったか！？」

スパンッ、スパンッ

「5秒遅刻だ、馬鹿どもが」

千冬の容赦ない一撃が零斗と一夏の頭に振り落とされた。その一撃にシャルルが目を丸くしている。

「さっさと並べ。お前らが最後だぞ」

これ以上叩かれるのは嫌なので三人は急いで列の最後尾に加わる。

「今日はずいぶんゆっくりでしたのね、零斗さん。いつもは遅れることなどありませんのに」

零斗たちのすぐ隣だったセシリアが棘のある言葉で言ってくる。

「男にはいろいろと事情があるんだよ」

「それはあの転校生の事ですの？零斗さん知り合いみたいでしたし」

「ちょっと零斗。そのことについて詳しく教えなさいよ」

零斗が後ろから聞こえてきた声に驚いて振り返る。

「鈴かよ、あんまり驚かせんなって。そういや今日は二組と合同で模擬選だって言ってたっけか」

「そんなことより、その転校生とのことについて教えなさい！」

「あいつは・・・ん？」

そのとき、キィーーーンという音が辺りに響き渡る。何事かと零斗が辺りを見回すと上から何かが下りてくるのに気が付いた。

「ど、どいてくださーーーい！！」

それはＩＳを装着した真耶だった。そして真耶の軌道はまっすぐに零斗に向かって突っ込んでくるものだった。それが分かると零斗はやれやれと肩を竦めＩＳを展開し真耶を受け止めた。

「まったく何やってるんですか、あなたはそんなでも一応教師でしょうが」

「あ、ありがとうございます如月君・・・ふ、ふえ！？」

急に顔を真っ赤に染める真耶。どうしたのかと零斗が思っていると自分が真耶の胸を鷲掴みしていることに気が付く。

「すっ、すみませんでした！！！」

後ろに跳ぶように真耶から離れる零斗。その時、彼の頭の数センチ横を何かが掠めていった。その何かが飛んできた方向を振り向くとセシリアがブルー・ティアーズを展開し《スターライトｍｋ２》を構えていた。それを見て零斗はさきほど掠めていったのがセシリアの撃ったビームだと理解する。

「あらら、はずしてしまいましたわ」

セシリアは笑顔の筈なのだが零斗は冷や汗が止まらなかった。どう

やってこの場を収めようかと考えていとガシンという音がした。

「今度は何なんだって危ねえ！！」

飛んできたものを咄嗟に避けるとそれは鈴の《双天月牙》だった。と、それがブーメランのように戻ってくる。零斗がそれを迎撃するべく武装を展開しようとした時、

ガキンッ、と《双天月牙》が弾かれ、おおっという声が上がる。それを撃ち落したのは真耶だった。

「何を驚いているお前ら。山田先生は元代表候補生だぞ。これくらいできて当然だ。それと凰とオルコットは力があり余っているらしいな。山田先生と模擬戦をやれ」

その後、行われた山田先生と二人の試合は山田先生の圧勝で終わった。

「シャルルの奴、どうしたんだろうな」

授業が終わった後、零斗達が着替えようとするとシャルルは二人は先に着替えててと先に行かせた。

「さあな、あいつにはあいつの事情があるんだろ・・・ん？」

ふと、二人は向こうから歩いてくる人影に気付いて足を止める。そ

の人影は規律正しい歩き方で歩いてくるラウラだった。

「よっ、ラウ」

片手を上げながら気軽に声をかける零斗だが、ラウラは表情一つ変えない。

「零斗、お前に話がある。放課後、屋上に来い」

可能な限り簡潔に伝えたいことだけを言うと、一瞬だけ一夏を睨み付け、回れ右をして去っていくラウラ。零斗はその後ろ姿をやれやれといった様子で見送る。

「まったく久しぶり、とかそういう言葉は無いのかよ、あいつは」

「なあ、零斗ってあいつと知り合いなのか？お前やたら親しげに話しかけてるけど」

「ああ、そうだ。お前には俺が昔ドイツにいたことは話たっけか」

「その事なら聞いた。確かその時に千冬姉と知り合ったって」

「よく覚えてたな。千冬さんはドイツ軍で教官をしてたんだが、その時担当していたのがシュバルツ・ハーゼ、通称黒ウサギ隊。これがラウの所属していた部隊だ」

「ああ、それで千冬姉のことを教官って呼んでたのか」

「その後、紆余曲折あって俺もその黒ウサギ隊の訓練に参加することになったんだよ」

一夏は納得した表情だったが、ふと何かを思い出した表情になる。

「そういえば、何だってあいつに俺を嫌ってるんだ？」

「そのことか。第二回モンドグロッソって言えば分かるか？」

一夏の表情が曇る。

「ああ、できればそのことは思い出したくも無いけどな」

ＩＳの世界大会モンドグロッソの第二回、第一回の優勝者である千冬は二連覇の期待の中、順調に勝ち進んでいった。だが、決勝戦の直前にそれは起きた。

一夏が何者かに誘拐されたのだ。その報せを聞いた千冬は決勝戦を放棄し一夏の救出に向かった。

「つまり、俺さえいなければ千冬姉は二連覇を成し遂げられた、ってことなのか」

「そうだ。ラウの奴は千冬さんの事をかなり慕ってるからな。でもまあ、安心しろ。俺がいる間はお前に手を出さないようラウに言っておく」

そういうと零斗はぽんっ、と一夏の肩を叩き、先に教室に戻っていった。

金の貴公子と黒ウサギ（後書き）

話を区切るタイミングが分からない・・・
もっと一夏と箒を書きたい

それぞれの思い

昼休みの屋上。そこで一夏と箒は二人で昼食をとっていた。二人が食べているのは箒の手作り弁当だ。

「うん、やっぱり箒の料理はうまいな」

「そ、そうか。お前の口にあって良かった」

一夏に料理を褒められて箒は僅かに頬を朱に染める。本人はいたって冷静であろうとするが口の端がにやけている。

「特にこの唐揚げなんかは絶品だな。ってあれ？何で箒の方には唐揚げがはいってないんだ？」

「ん、ああ、いろいろあってな」

言葉を濁す箒。箒の弁当に唐揚げが入っていない理由は上手にできたのが一夏の分だけだからである。

「こんなにうまいのにな。ああ、そうだ」

一夏は自分の唐揚げを一つ箸でつまむと箒に差し出した。

「俺の一つやるよ。ほら、あーん」

「！？」

一夏の行動に箒は顔が真っ赤に染まり、頭の中がパニックになる。

（そ、そんなこと恥ずかしくてできるわけ、でもこんなチャンスは滅多に無いし、ええい覚悟を決めろ私）

腹をくくった箒は顔を真っ赤に染めたまま一夏の差し出した唐揚げを食べる。

だが、一夏といわゆるカップルがするような、はい、あーんをやったことで頭がいっぱいで味などまったくわからなかった。

「やはり・・・いいものだな」

「だろ」

箒と一夏の思っていることは微妙に異なっているがどうでもいいことだろう。

二人の間に穏やかな時間が過ぎてゆく。なんてことはない日常。ふと、一夏が口を開く。

「こうしてるとさ、昔の事を思い出すよな。そういえば、箒の両親はどうしてるんだ」

昔、箒が転校する前、家族がたった一人の姉しかいない一夏はよく箒の家で食事をご馳走になっていた。

だが、その言葉を聞き箒の表情は曇る。

「・・・どうした？箒」

心配になった一夏が声をかけるが、箒はゆっくりと話し出す。
「私も分からないんだ。父さんと母さんがどこにいるのか」
「・・・そうなのか。ごめん、何も知らずにそんなこと聞いて」
一夏が沈んだ表情で頭を下げると箒は首を横に振る。
「いいんだ、気にしなくて。それよりも不思議なものだな」
箒が重苦しい空気を打ち消すように明るい声で言う。
「ＩＳが原因で離れ離れになって、でも今度はＩＳのおかげでまたこんなふうに一緒にいられる」
「・・・そうだな」
その時、隣に座る箒が一夏の肩に頭を乗せるようにして体を預ける。
一夏は最初は驚いていたがすぐにそれを受け入れる。
「私はまた一夏と会えて本当に嬉しかった」
箒が胸に秘めていた、一夏への淡い恋心。いつもは素直になれない自分がその気持ちの一端をを伝えられた喜び。そしてそれを拒絶されるかもしれないという僅かな恐怖。
それに対して一夏は微笑みを浮かべる。
「ああ、俺も箒にまた会えて嬉しかった」

その一夏の言葉に箒は嬉しそうな表情をする。いや、本当に心の底から嬉しいのだろう。

「なあ、一夏。今度の学年別トーナメントのことは聞いてるか？」

「ん？ああ、聞いてるけど」

「それでだな、もし私が優勝したら」

箒はそこで一拍置き、覚悟を決めた顔で

「私と付き合ってくれないか」

そう言った。

その頃、ＩＳ学園の食堂では零斗、鈴音、セシリア、シャルルが食事をしていた。零斗の隣にシャルルが座り、机を挟んだ反対側にセシリアと鈴音が座っている。

「そういえば零斗、あんたってかなり謎よね」

鈴音が突然そんなことを言った。

「どうしたよ、いきなり」

「いやね、そういえばあたし零斗のことなにも知らないわねって思って。ちょっとあんたのこと教えなさいよ、別に減るもんでもないんだし」

「そういえば、零斗さんは自分の事をあまり話しませんものね。あたくしも聞きたいですわ、零斗さんのこと」

「僕もききたいかな」

セシリアとシャルルが身を乗り出して聞いてくる。

「まったく、別に聞いても面白くもねえ話だぞ」

目を輝かせている三人の頼みを断りきれず、零斗はしぶしぶ受諾する。

「そうだな、まず何が聞きたい？」

「そうね、まずあんたって何処の出身なの？銀髪なんてそうそういるもんじゃないでしょ」

「あー、悪いがその質問には答えられん。俺もよく知らねえから」

零斗の答えに三人の表情が固まる。

「え・・・それって・・・」

「俺は物心ついた時にはもう孤児院にいた。親の顔も憶えてねえし、別に知りたくもねえ。だから、そんな気にすんなって」

零斗がまずい事を聞いてしまったと暗くなっている三人に言う。

「まあ、その後いろいろあって育ての親に引き取られた。今の名前は育ての親が付けたんだ」

「そうでしたの。その育ての親というのはどのような方ですの？」

セシリアができる限りさっきの事を意識しないようにいつもと同じように話す。

「そうだな、一言で言うなら頭のネジが1ダースほど欠けてる人か」

「「「は？」」」

零斗の表現に三人の目が点になる。

「それってどういう事？」

三人を代表しシャルルが聞くと、零斗はどこか呆れたような表情になって

「具体的に言えば、面白半分で俺に軍隊を襲撃してこいとかそういうことを言う人だ」

三人の表情が引き攣る。

「・・・それ、本当にやったの？」

「ああ、それこそ世界中の軍隊にちょっかい出したな。そういえば、中国軍にやった時に鈴と会ったんだっけか」

「あんた、それで警察に追っかけられてたの？」

鈴音が呆れ顔で言い、零斗は苦笑した。

「そういえば、イギリスでも何年か前に正体不明のＩＳに襲撃されたという事件があった気がしますわ」

「たしかフランスでもそんなことがあったような」

「・・・間違いなく俺だな」

一同が苦笑いを浮かべる。

「さて、あとは何かあるか？」

「零斗は何でＩＳ学園に入学しようと思ったの？」

シャルルの何気ない質問。だが、それを聞いた零斗の表情が一変する。まるで涙を堪えているような、そんな表情だった。

「零斗さん、大丈夫ですの？なんだか顔色が優れないようですが」

「ああ、大丈夫だ。ただ昔のことを思い出しただけだ」

「・・・いったい何があったの？」

零斗は少しの間考え込んでいたが、

「話たほうが楽になるかもな」

その出来事について話始めた。

「俺がここに入学しようと決めたちょっと前の話だ。俺はいつもの無理難題を終えて帰る途中で、俺は襲撃を受けてＩＳでの戦闘になった

そのＩＳの操縦者はかなり強くて俺は撃墜されないのがやっとだった」

「零斗が勝てないってどんな強さよ、そいつ」

「俺とその襲撃者の戦闘はかなり長引いて、その途中である村を巻き込んじまった。最終的には俺はそいつを撃退させることはできたが、その巻き込まれた村の住人は全滅だった」

零斗が話す衝撃的な出来事に口を閉ざし俯く三人。

「その頃の俺は自分の強さに驕っていたんだ。それで俺は自分の強さがただの上辺だけのものだって嫌というほど思い知らされた。だからさ、ここで捜そうと思った。本当の強さが何なのかを。」

そう言った零斗の表情は力強く、でもどこか脆く今にも壊れそうな表情だった。

そんな零斗の顔を見て、放ってはおけないと思う鈴音とセシリア。

「ねえ、零斗。あんたの気持ちは分かるけど、あんまり無理するんじゃないわよ」

「そうですわ。もし何かあったら遠慮なくわたくし達を頼ってください。あなたは一人じゃ無いのですから」

二人の言葉に零斗は一瞬キョトンとしていたが

「・・・そっか。ありがとな、二人とも」

先程のとは違う普通の少年らしい笑顔を浮かべた。

放課後、零斗がラウラに言われたように屋上に行くとそこには既に直立不動で立つラウラの姿があった。

「よう。話って何だラウ」

「単刀直入に言う。零斗、ドイツに、シュバルツ・ハーゼに戻って来い」

真剣なラウラぼ瞳。だが、零斗は肩を竦めて

「やっぱりそれか。悪いが俺はドイツに戻るつもりはねえ。そもそも軍隊ってものが性に合わないからな」

「っ！？何故だ！お前も強くなることを望んでいたはずだ！こんなＩＳをファッションと同一視しているような連中と共に学んだところで何も変わりはしない！」

ラウラは怒鳴りつけるようにそう言い放つ。零斗はふう、と息をつき、柵にもたれかかりながら言った。

「なあラウ。千冬さんが俺達に言ったこの言葉、憶えてるか？『力を持っているのと、強いということは違う』って。俺さ、言われた時は理解できなかったけどさ、今なら理解できる」

「・・・その強さは手に入れらるのはドイツではなくここだというのか」

「そういうことだ、話がはやくて助かる」

零斗の返答を聞きラウラは俯き悔しそうに唇を噛む。零斗はそれを見ていていられなかったのか

「だが、どうしても戻って来てほしいってんなら一つ条件がある」

その言葉にラウラは顔を上げる。

「今度の学年別トーナメントは知ってるな」

「それで優勝したら、ということか」

「そうだ。ここで本当の強さを捜してる俺よりドイツにいたお前の方が強いってんなら考え直す」

「その言葉、忘れるなよ」

ラウラは踵を返し校舎へと戻っていく。

（あいつはここよりドイツにいた方がいい筈だ。私は絶対にアイツを連れて帰る）

少女のその感情が少年に対する特別な思いだと気が付くのはまだ先の話である。

「じゃ、俺も部屋に戻るとすっか」

ラウラが戻っていったのを見送った後、零斗も部屋に戻る。だが

「あれ、山田先生？」

部屋の前で真耶がきょろきょろと何かを捜しているよな動きをしていた。と、彼女は零斗を見つけるとタタタと早足で近づく。

「如月君、お引越しです」

「・・・すみません。それだけじゃ、まったく分からないんですが」

「あ、そ、そうですね」

慌てて説明を始める真耶。彼女の話を纏めると、まだ学校に慣れていないシャルルが一人部屋なのも心配なので相部屋になって面倒を

見ろとの千冬のお達しらしい。

「俺がシャルルと同じ部屋に映ればいいんですか？」

「はい。荷物はすぐに纏められますか？」

「男一人の荷物なんてたかが知れてますよ」

言った通りに零斗の荷物は衣服と最低限の生活必需品と愛用のノートパソコンくらいだったので部屋の移動はすぐに終わった。

「そういうことだから、これからよろしくたのむぜシャルル」

「うん。こちらこそよろしく」

それぞれの思い（後書き）

次回はシャルがメインの話です。

トーナメントに向けて

零斗とシャルルの部屋。カタカタと零斗のタイピングの音が響いている。

「何やってるの？」

さっきまで雑誌を読んでいたシャルルが零斗の後ろからひょいと画面をのぞきこむ。

「今まで得たＩＳのデータを纏めてたんだ」

零斗のＰＣには訓練などで得た白式やブルー・ティアーズなど、各機のデータが入力されていた。本来、ＩＳそれも第三世代のデータなど勝手に取得したらまずいのだが零斗は個人利用だから問題無いと勝手に解釈し所有していた。

「そういや、シャルルも専用機持ちなんだよな」

「うん。といっても、ラファール・リヴァイブのカスタム機で第二世代型だけどね」

「専用機を持ってるだけでも凄いだろ。ＩＳは世界で４６７機しか存在しないんだから」

ＩＳは、厳密に言えばＩＳのコアは世界で４６７個しか存在しない。その理由はＩＳのコアを製造することができるのが世界中で篠ノ之束のみで、その束が４６７個目を造った後失踪した為である。また、ＩＳが開発されて以来、世界中の科学者が血眼になってコアを作り

出そうとしたが芳しい成果は得られていない。

「・・・あれ？これは？僕はこんな機体しらないけど」

シャルルがＩＳの名前が表示されたリストに連なる名前の一つを指さす。そこには『ｋｕｒｏｇａｎｅ』という名前が表示されていた。

「ああ、黒鉄か。そりゃ分かるわけねえよ。それは俺が造った機体なんだからな」

「え？造った？」

「まあ、造ったといっても設計だけだけどな。第二世代型、純国産ＩＳ打鉄をベースに出力を１．５倍、主要武装《村正》にはシールドバリア中和機能が搭載されてる。扱う人の腕しだいで第三世代にも勝てる」

ちなみに現在、黒鉄は零斗のコネにより倉持技研で製作が進められている。

「シールドバリア中和ってつまり一夏の雪片の零落白夜と同じ機能がついてるの？」

「いや、あれほどの威力は無い。あれはシールドバリアを消滅させるが、こいつは減衰させるのがやっとだな。さしずめ《零落白夜》の劣化版ってところか」

「へえ、それにしても零斗って凄いんだね。ＩＳの設計まで出来るなんて」

「まあ、昔とった杵柄ってやつさ。そういえば一夏で思い出したが、一つ頼みがある。一夏に射撃について教えてやってくれないか」

「いいけど、零斗のほうが適任なんじゃないの？すごい射撃の腕だって聞いたけど」

「ちょっと待て、いったい誰からそんな話を聞いたんだ？」

「織斑先生。なんでも１２００ヤード（約１．２Ｋｍ）先の標的を撃ち抜いたことがあるって。これ、本当なの？」

シャルルが半信半疑といった様子で聞くと、零斗はさほど興味なさそうに肯定する。

「まあ確かにドイツに居た頃やったことはあるな。でも、俺はあまり人に教えるのは好きじゃねえし、ちょっとやることもあるしな」

「やること？」

「学年別トーナメントの為に頼んでおいた武装がやっと届いたんでね。それの試し撃ち。俺のＩＳは少々火力不足でな、とびきり高火力なのを頼んでおいた」

「あれ？零斗のＩＳって高機動型なんだよね。そんなの装備させたらせっかくのスピードが活かせないんじゃないの」

「そこは、俺の腕でカバーするさ」

自信の表れか、はたまた自惚れかにやりと笑みを浮かべる零斗。

「まあ、ともかく一夏のことは頼んだぜシャルル」

「うん、わかった。それと今日はもう寝よう」

零斗はＰＣを片づける。もういい時間になっていたので二人は寝る準備をする。だが、その時シャルルが零斗のＰＣに意味ありげな視線を向けていたことに零斗は気が付かなかった。

「一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そうなのか？一応理解してはいるつもりだけど」

「僕の装備を貸すからさ、一回撃ってみなよ」

シャルルが一夏に射撃武器についての指導をおこなっていた。零斗がそれを見てよくやってくれてるなと感心しながら、ふと周りを見ると

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「顔が怖いぞ、箒ちゃん」
箒が親の仇でも見るかのような表情でシャルルを睨み付けていた。一夏にＩＳの事を教えるという役目をシャルルに取られたためである。
「・・・気のせいだろう。別に私はいつも通りだ」
「ふうん、まあ本人がそう言うならそういうことにしとくけどよ。それより聞きたいんだが、あいつらどうしたんだ」
零斗が指をさしてアリーナの一角を示した。そこでは
「凰さん、あなたには負けませんわ！！」
「せいぜい言ってなさい、セシリア！！」
セシリアと鈴音が異様に気合を入れて特訓をしていた。その雰囲気に近づくことすら躊躇われる。
零斗は知らなかったが女子の間では『学年別トーナメントで優勝したら織斑一夏か如月零斗と付き合える』という話が広まっていた。セシリアと鈴音がやる気に満ち溢れているのはそのためである。
これは箒が一夏に言った『学年別トーナメントで優勝したら付き合ってくれないか』というのが何故か背びれ尾ひれ付いて広まったものだ。
ちなみに、もし自分以外の誰かが優勝したら一夏と付き合うことに

なるので箒の内心は大慌てである。
箒は一夏への指導もしたいが、トーナメントに向けての特訓もしなければならないと迷っていた。
「やはりわたしも一夏の――」
「ここで特訓すれば今度の試合で一夏にいいとこ見せられるかもな」
「さあ、気合を入れて特訓するか！！」
一夏という言葉を出した途端にやる気になる箒に苦笑する零斗。
「じゃあ、俺が模擬戦の相手にでもなってやるよ」
「新しい装備の試し撃ちをすると言っていなかったか？」
「そういうのは実戦形式が一番だろ」
にっと笑うと零斗は両手に大型のライフル《Ｍ９１－カトラス》を展開する。全長約２ｍのライフルはＩＳの実弾兵器の中では最高クラスの威力を持つ。
１０ｍ程の距離を取り、互いに武器を構える。
「全力で来ないと一瞬で終わらすぞ」
「最初からそのつもりだ。ゆくぞ！」

「疲れた。そして腹減った」

一夏達との特訓が終わり、部屋に戻って来た零斗はベットに倒れ込む。

「お疲れ。篠ノ之さんとの模擬戦は大変だった？」

「ああ、代表候補生じゃないからって正直甘く見てたぜ。流石は剣道全国大会の優勝者。剣の腕は伊達じゃなかった」

零斗の装備はライフル、箒の装備は日本刀なのだから零斗のほうが圧倒的に有利に思われた。だが彼の予想以上に箒の実力は高かった。

「代表候補生を除けば5本の指に入るくらいの実力はあるんじゃねえか、多分」

「今度のトーナメントで零斗のライバルになりそう？」

「かもしれねえな。勝負なんて何があるか分からねえからな。さてと」

零斗は手元の時計を見ると立ち上がる。

「腹減ったから俺は食堂に行くけど、シャルルはどうする？」

シャルルは何かを迷っているような表情をしたが

「いや、僕は後で行くよ」

「そうか、わかった」

零斗は食堂に向かうために部屋を出ていった。シャルルは零斗が部屋を離れたことを確認すると彼の私物の中からノートＰＣを取り出す。

それを起動させると目的のものを捜す。

（ＩＳのデータが入ったファイルは・・・あった）

目的の物、先日、零斗が整理していたＩＳのデータが入力されているファイルを見つける。

シャルルがそのファイルをクリックして開こうとした時

「人の物を勝手に弄るってのはお世辞にもいい趣味とは言えねえな」

突然、後ろからかけられた声に振り向く。すると部屋のドアの傍に零斗が腕を組み、壁に寄り掛かるように立っていた。

「れ、零斗。どうして・・・」

驚きに声が震えるシャルル。二人の間に緊張が走る。
「なに虫の知らせってやつさ。ところでシャルル。それがお前が男の振り（・・・・）までして入学した目的か？」
『男の振り』という零斗の言葉に心臓がビクンと跳ねるのを感じるシャルル。
「・・・な、何で分かったの。僕が女だって」
「そうだな、最初にもしかしてと思ったのはお前を抱きかかえたときだ。お前は男にしては軽すぎたからな。
あと、更衣室でお前が俺たちと一緒に着替えるのを避けた時か。まあ、これだけなら別に男だと断定するにはちと足りねえが、決定的だったのはお前がＩＳの操縦が上手過ぎることだ。どう見ても一夏とは違って当たり前の様にＩＳを動かしてきた奴の動きだ」
と、そこまで言って零斗は緊張を緩めると
「なあ、話してくれないか。そこまでしているその理由（わけ）を」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3327t/

IS　〜RISE　ON　METAL　WINGS〜

2011年8月12日08時43分発行